ある日、命令で遠くの兵器工場へトラックで運ばれました。そこで、戦争に使う風船爆弾を作るためでした。風船爆弾は、特殊な紙風船に爆弾をつるさげて、気流にのせて、爆発させる方法で、日本の勝利に導くと信じられてきました。十六才といえば、今の私とそんなに変わりません。友達と話したり、遊んだり、毎日楽しく暮らし、勉強だって、しっかりやりたかったはずです。少女は、戦時中ということで、こんな、ごく普通な生活ができなくて、きっと悔しかっただろうなと思いました。普通の生活ができなくなってしまう事も、戦争の恐ろしさだと思います。

少女の一日の生活は、朝早く起きて、食事を済ませそれぞれ、仕事場所へ移動して始まります。風船の原紙を作る仕事でした。一枚一枚、ていねいに仕上げて、仕事が終わるまでに、決められた枚数を作らなくてはいけません。作ったら、厳しくチェックされました。疲れて、部屋にもどっても、狭い空間で眠り、空襲警報が鳴ると、すぐに逃げなければいけない、そんな生活が続きました。こんな日々は、きっと少女にとって苦痛だったと思います。「やめたい、逃げたい。」そんな思いが少女にはあったはずです。私だったら、こんなにきつい生活が続いたら、一週間もしないうちに、逃げてしまうと思います。少女がそうしなかったのは、自分だけではなかったから、世の中全部がそういう状況だったからです。自分が逃げたら、大切な家族に迷惑がかかる、国のために自分ができる事を必死でがんばったんだと思います。

そんな少女にとって、一番の楽しみは一年のうちで、たった三日間の休暇でした。たった三日だけしか休めないなんてかわいそうだなと思いました。でも、たった二泊三日でも、家に帰れる少女たちにとっては、何よりもうれしかったのです。家に帰って、お母さんの作った食事を食べたり、いろんな話をした少女は、本当にうれしかっただろうと思いました。戦時中の粗末な食事も、家族で食べればおいしかったと思います。今の私は、すべてにおいて恵まれています。生まれてからずっと、食べ物に困った事はないし、きちんと学ぶ事もできます。ほしいな、やりたいなと思った事は、ほとんどできる環境にいます。そういう事が当たり前になりすぎて、幸せだなと実感する事が少なかったと思います。この少女と比べようがないくらい、幸せなのに。

卒業する年になっても、少女たちは、家に帰ることはできません。卒業すれば帰れると思っていたのに、帰ることができなくなってしまった少女は、頭の中が真っ白になってしまったのではないかと思います。帰りたいのに、また、きつい仕事の日々が続くのか、そんな絶望に近い思いが、少女の心の中にはあったかもしれません。

もし、私が少女の立場だったら、戦争が続く限りは、終わらない仕事が嫌になり、逃げていたと思います。実力があり、試験に受かった人は、工場から出て、また違うもっと条件の良い所で働く事ができます。落ちた人は、いつもの生活の日々です。今まで、辛かった時や、逃げ出したくなった時に、仲間がいたからこそ、乗り越えてこれたはずです。仲間の存在は、大きかったと思います。それなのに、残された人は、悲しかっただろうし、仲間が、どんどん減っていくことに、不安や、あせりを感じていた事でしょう。結局、少女たちのこのような生活は、原爆が落とされ、戦争が終わるまで続きました。戦争をした事で、得たものは何ひとつありません。失った物も、人も、時間も、もう二度と戻りません。少女だって、戦争が終わったからといって、以前のように勉強ができたわけでもないし、むしろ食べる物に困るぐらいの混乱の中で生きていくしかありませんでした。なにも悪い事をしたわけでもないのに、その時代に生まれたというだけで、苦しい時を、過ごさなければいけなかった人達、個人の力ではどうしようもなかったとはいえ悲しすぎます。

今の日本は、憲法で戦争をしない事になっています。でも世界では、まだまだ戦争をしている国があります。まき込まれて、苦しい思いをしているのは子供です。戦争は絶対やってはいけないし、暴力で人を支配してはいけないと思います。この本を読んで、改めて平和を手に入れる難しさ、大切さ、尊さが分かりました。

アナザーヴィーナス

川根高等学校三年
小澤理沙（りさ）

人間は一人では生きていけない。周りの支えがあってこそ強く、人間らしく生きていけるのだと思う。

スクールカウンセラー香月笙子にとって、自殺をはかった生徒・湯田有紗との出会いは自分を変えるものだった。有紗はいじめを受けていた友達・真由に対して酷い言葉を放ってしまった。真由は自殺し、その罪悪感から有沙も自殺をはかってしまったのだ。二人が自殺をはかってしまったのは、周りに助けてくれる大人がいなかったから。笙子はスクールカウンセラーという仕事を見つめ直し、全力で有沙を救おうとする。

近年、いじめが多発している。「いじめブーム」という言葉があるくらいだ。なぜ起こってしまうのだろう。いじめがなくなる方法はないものか。

いじめられた側は一生消えない心の傷を負ってしまうだろう。下手をすると心の病気にかかってしまったり、人間恐怖症になってしまうかもしれない。いじめられるということは自分を否定されること。こんなにも辛いことはないだろう。

いじめる人は過去にいじめられた経験がある人が多いと聞いた。それを聞いて、私は疑った。過去に経験したことがあるなら、いじめられる苦しさを分かっているはずだ。なのに、なぜその苦しさを人にぶつけるのだろうか。苦しさを分かっているなら心が傷まないのか。

有沙は真由が自殺をしたのは自分のせいだと思い、深く自分を責め続けた。もしいじめてしまった相手が自殺をしたら、有沙のように自分を責める人が出てくるだろう。いじめられた方は勿論傷つく。だが、いじめた方も大きな罪悪感や後悔を感じて生きていくことになるかもしれない。

アナザーヴィーナス
吉富多美著

自分の命は残り少ないと、医師に告げられたスクールカウンセラーの笙子と、自分のせいで友人を死なせてしまったと悔いる有紗。不安と孤独の闇の中で、二人は必死に生きるための出口を探し続けます。世代を超えたガールズトークを通じて、心の痛みを互いに共感し合います。心にやさしさと温かさが満ちてくる一冊。

いじめられた方も死のうと考えることだけはやめてほしい。人生には、辛く苦しい時が何度も訪れる。苦しすぎて、いっそのこと死んだほうが楽になると思うことがあるかもしれない。だけどその苦しさを乗り越えた時、人は強くなれるのだと私は思う。また、死のうと考える前に自分の味方になってくれる人がいないか一度考えてほしい。親、友達、先生など絶対に助けてくれる人はいるはずだ。話を聞いてもらうだけでも、何かが変わると思う。

笙子のように全力で助けようとしてくれるスクールカウンセラーの存在はとても大きいと思う。私は中学生のときに悩みをかかえていたことがあり、担任の先生に相談した。その先生は私の話を真剣に聞いてくれた。そして私の良いところを語ってくれたのだ。その時、嬉しさと安心感で一杯だった。本当に救われた感じがした。その先生には感謝の気持ちで一杯だ。辛い時に誰かに話を聞いてもらうと、本当に心が楽になる。また、相手が自分の話を一生懸命に聞いてくれると嬉しさが込みあげてくる。

私は将来、保育士になりたいと思っている。子どもの世話をしたいということもあるが、親の相談に乗ってあげたいと強く思うからだ。そう思ったきっかけは、私は友達や先生にたくさん助けてきてもらい、今度は自分が誰かを助けてあげたいと思ったからだ。また、この本を読んでその思いが強くなった。笙子が一生懸命に子どものことを考え、全力で助けようとする姿に心を打たれた。将来私も笙子のような先生になりたい。

いじめや自殺をする人は増加している。そういった人達にこの本をぜひ読んでもらいたい。この本を読むことによって、心の中で何かが変わってくると思う。改めて現在起こっている問題の深刻さを認識することができた。いじめを無くすことは難しいけど、減らすことはできると思う。それには周りの助けが必要だ。周りが支えてあげることでずいぶん変わってくると思う。また、こういった本やテレビ番組がもっと増えてほしい。きっかけがあれば、たくさんの人が考えを深めることができる。全国の人に、人の心と命の大切さを改めて見つめ直してほしい。この本を読んで、何事にも希望を捨ててはいけないと思った。また、人間は支えあって生きていくことによって強くなれるということを知った。私は困っている人に手を差し延べてあげられるような人間になりたい。そして周りにいる人や、この先出会う人達を大切にして生きていきたい。

※それぞれの感想文については、原文のまま掲載しています。

町内には本に親しむ環境があります。ぜひ皆さんも、心に残る1冊との出会いを大切にしてください。

「図書ネット」の管理をしている
原田みどりさん（下泉）

わたしが管理している「図書ネット」とは、中川根地区の小中学校の図書室と山村開発センター図書室をインターネットでつないで蔵書管理するシステムのこと。このシステムによって子どもたちは、他校の図書室の本を自分の学校で検索して借りることができます。ただこの図書ネットは、あまり知られていないため利用が少ないのが現状です。もっと子どもたちに知ってもらう努力が必要だと思っています。

町内には、町民の皆さんが本を借りることができる町営の図書室が3カ所あります。山村開発センターと文化会館、それに移動図書館車のやまびこ号です。皆さんが本を借りる際は、カードや貸し出し簿に記入するだけ。とても簡単に利用できます。しかし残念なことに、ここ数年本の貸し出し数が減ってきています。山村開発センター図書室の例で言うと、この5年間で約半分にまで減ってしまっています。今年も10月末までに約800冊の利用しかありません。文化会館でも同じような傾向が見られます。

現代はテレビやパソコン、携帯電話などで簡単に情報が得られる時代です。本を読まなくても、テレビ番組を見たりゲームをしたり、インターネットで学習することもできます。しかし本の魅力は知識を得ることだけではないと思うのです。本の一番の魅力は「記憶に残ること」。テレビ番組の内容などはやがて忘れてしまいますが、本で読んで感動したことはいつまでも心に残ります。本は自分で想像力を働かせて読むので、その分印象に強く残るのではないでしょうか。また、好きな本を人に勧めたり、感想を語り合ったりすることで人と人とのつながりも生まれます。本ならではの魅力といえるのではないでしょうか。

わたしは数年前まで、本をあまり読みませんでした。でも今、図書室で本に囲まれて仕事をするうちに、本の魅力を知り、読書が好きになりました。今では手元に読みかけの本がいつも置いてあったり、最近読んだ本について親子で会話したりと、本が身近にある生活が当たり前になっています。

近年、子どもの活字離れや読書離れが叫ばれていますが、何も子どもだけの問題ではなく、大人にもいえることだと思います。まずはお父さんお母さんが好きな本を読むことから始めてみませんか。子どもは家庭環境に影響されますから、しだいにお子さんも読書を好きになるかもしれません。たまに親子で同じ本を読んだりすれば、共通の話題ができ会話も弾みますね。

町営の図書室には小説、児童書、実用書など、魅力あふれる本がたくさんそろっています。皆さんが読みたくなる本もきっとあると思います。ぜひ皆さんも、心に残る自分だけの1冊と出会ってください。

本のある暮らしを―　終わり